

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第600号 平成25年8月26日

含羞

塾頭通信も、回を重ねて600号となりました。これ迄、駄文に駄文を重ねて600号になりましたので、私としては、こんな駄文にお付き合いいただいている延べ4万8千人余りの方々にお礼を申し述べたい気持ちで一杯です。

色々な人から、「600号というのは凄いですね」等とお褒めの言葉等をいただいて、正直面はゆい気持ちでいます。

誉められると、かえって逃げ出したくなる、それ程ヤワではないとはいえ、嬉しいというよりは気恥ずかしいという方が当たっているように思います。そんな心の内を探っている内に、ふと「含羞」という言葉が頭をよぎりました。多分、今の気持ちを一言でいうなら「含羞」が最も相応しいだろうというのが、実感です。

「含羞」という言葉は、表情の中にハジライを隠しているという、如何にも奥ゆかしい風情を良く表していると感じます。

しかし、「含羞」という言葉も、この人にかかれば別の意味合いが浮かんで来ます。

作家の太宰治は、「文化と書いてハニカミとルビをふれ」という有名な言葉を残しており、「含羞の人」と呼ばれています。

この「文化と書いてハニカミとルビをふれ」といった時の「ハニカミ」は、恥じらいとか奥ゆかしさとは別のものの様に感じます。

評論家で麗澤大学教授の松本健一氏は、太宰治の「ハニカミ」について、「志賀直哉に代表される白樺派の老大家たちは、戦争中、大衆の生活と無縁である事によって、ファシズムという「政治」を傍観していた。この事は、太宰にとって、文学を大衆の生活から切り離して特権化している行為とみえた。これに対して、太宰はその人間的弱さゆえに大衆の生活に徹底的にまきこまれ、しかもそこで含羞、ハニカミという弱者の武器に縋りついて「政治」に抵抗したのだった。」と述べると共に「戦後、その老大家たちが傷もうけずに、戦前と同じ位置にありつづけることに我慢ならなかったのである。とすれば、「如是我聞」にみられる太宰の激しい抗議の声は、ハニカミによって自己表現を持し続けて来たものの自負から出ている、ということもできよう。」と述べています（松本健一著「太宰治 含羞の人伝説」から）。

太宰治という人は、自惚れやでありながら、気の弱い、照れ屋で、生来気の弱さを根に持った人といわれていますが、その彼は「ハニカム」事を武器に自分の本音

を隠しながら既存の権威に抵抗しようとしたのだと思います。

太宰治の「文化と書いてハニカミとルビをふれ」という言葉は、既存の権威に対して投げつけたものに違いなく、だとするとこの言葉は、抵抗というより激しい抗議にも聞こえます。

私は塾頭通信を書くに当たって、心がけている事があります。それは、個人を傷つける様な表現はしない、政治的な発言は控えるという事です。それでも、個別の課題では時に政治や行政批判に及ぶ場合があります。勿論、私の発言には何らの権威がある訳ではありませんし、影響力があるとも思っていませんが、それでも、弱き者の声の代弁者ではいたいと思っています。

600号は遠い道程でしたが、しかし、通過点に過ぎません。これからも、心して発言を続けて行くつもりですが、その為にも私は、常に、弱者への目配りと権威に対する批判精神、そして何よりも、いくばくかの「ハニカミ」を忘れぬ様にしなければと思っているところです。(塾頭：吉田 洋一)